

## 〈読み〉とは何か

――混迷する文学研究への一視点――

前田 角藏

一

最近、日本の近代文学という狭い研究分野の中でのことだが、この論文はテキスト(作品)の〈読み〉をめざしているのか、それともそれを参考にしながら文化研究をめざしているのかわからないものに遭遇して困ってしまうという愚痴をきくことが多い。もちろん、大変、すぐれたいい論文もあるが、そもそも何を主張したいのかわかりにくい論文が多くなっているというのである。どうしてこんなことがおこるのか。そしてこの原因はどこにあるのかと考えると実は一九七〇年から八〇年代にかけての大きな時代の転換期の中での西洋発のテキスト論あるいはポストモダン論といわれる西洋文化の波の不幸な受容の仕方そのものにいきつくのではないか。

いわゆるテキストが作者や主人公の内面の自己表出と信じられていた時代の〈読み〉は、テキストの真相に迫るために、テキストの〈起源〉であり、創造主であるところの作者のことを調べた方が確実にその真相(正解)に近づけるのではないかと考えられ、作者還元主義的な〈読み〉が支配的であった。日本では私小説的な〈読み〉といわれている。

ところで、西洋からテキスト論や語り手論が移植されるにつれてこうした〈読み〉の慣習が根本的に否定されることになった。例えば、ロラン・バルトは、『物語の構造分析』(花輪光訳、みすず書房、一九七九年)のなかで、作者はテキストの「起源」ではなく、そもそもテキストは「無数にある文化の中心からやって来た引用の織物」でしかないとして

「作者の死」を宣言し、「読者」こそその「あらゆる引用」が収斂し、「統一性」をもたせる最終的な「宛て先」(「誰か」)だという考えを主張した。この考えに従えば、読者が百人いれば百通りの〈読み〉がうまれることになり、ただ一つの普遍的な〈テキスト〉など存在しないということ、ここから、〈読み〉の多義性とか「差異の戯れ」などとささやかれ、いわばどんな〈読み〉でも〈許される〉といった読者中心主義ともいうべき一種の価値アナキーの状況を生み出していくことになる。ここでは〈テキスト〉の「解説」

(正解)にかわって「引用の織物」の痕跡を「解きほぐす」(傍点ママ)ことが説かれ、文化(制度・構造・言語)の研究が推奨されていく。そしてさらに、ポスト・コロニアリズム論や国民国家論が加わることによって、これまでの作者還元主義的な〈読み〉や研究がいよいよ〈古いもの〉とみなされ捨てられていった。もちろん、生身の作者と切れた虚構空間

- 1 -

それ自体の持っている起爆力を解き明かすことで、これまでの日本の作家・伝記研究の水

準を飛躍的に発展させ、近代的自我史観と称される自閉的な近代文学史像を大きくゆさぶるとともにすぐれた文化研究の業績を生み出すといったプラスの面があったことを否定するわけにはいかない。しかし、今、私が問おうとしているのはそうした西洋発のテキスト論あるいはポストモダン論の拓いた〈功〉の部分ではなく、いわばどんな〈読み〉でも〈許される〉といった価値アナーキーの状況を生み出してしまったと思われるその〈罪〉の負の部分である。

## 二

西洋発のテキスト論あるいはポストモダン論についてはマルクス主義の一時的避難だという人もいる。しかし、私には、そこには、スターリン主義あるいはナチスのユダヤ人虐殺へとたどりついた西洋知性への根源的な問い直しがあったのだと考えている。西洋、キリスト、マルクスという〈絶対〉〈唯一〉〈中心〉とどう距離をとり、超えていくかという緊張感、切実性がそこにはあり、それは新しい西洋の〈主体〉や〈価値〉の再生の試みの思想であったのだと思う。(注1) 例えば、バルトは〈読み〉の一回性を主張したが、それは多義性、差異性を無条件に肯定したのではなく、そこには「ドクサ」(通説)を「超えるもの」としての豊かな可能性を持たなければならないという前提があったので、差異ならなんでもいといった、つまり、「差異の戯れ」といった軽薄なものではなかった。ところが、日本のテキスト論者は、この西洋の〈捉え直し〉としての思想の急所―〈主体〉や〈価値〉の壊しではなく、それらの新しい再生の試み―を見逃(誤読)し、多義性、差異性といった言葉の表層に感応してしまったのであった。たとえば、柄谷行人は、〈主体〉や〈価値〉など意味の病(「意味という病」 河出書房新社 一九七五年)などといったがその格好の例である。たしかに、この時期、安保闘争と学園闘争の挫折感の中で人々は生き方の方向性を見失い、その自信喪失の中で、無条件に絶対化し神聖化していた過去の〈主体〉や〈価値〉に対して深い懐疑心を抱えていた。その傷ついた心には西洋発のテキスト論の急所は届かず、多義性、差異性こそいのちという甘いささやきが自分にとってまことに都合のいい救いの思想として受け入れられたのである。こうした〈主体〉や〈価値〉外しの日本のテキスト論の受容の仕方から、「和風てくすと論」(田中実注2)、「和風ポストモダン論」(高口智史)と揶揄されたのも致し方がないだろう。

しかし、西洋発のテキスト論を、〈主体〉や、〈価値〉、の壊しの理論として真逆に流通させてしまった理由はそれだけではなかった。紙面の関係で詳述できないが(注3)、日本では、

展開されてきた。一九三〇年頃のプロレタリア文学の隆盛期の頃、政治的に価値ある作品とされたものでもまったくつまらない、おもしろくもない作品があり、一体、価値ある作品とはなんなのか、どのような評価の基準をたててその価値を論じたらいいのかという本質的な問題が、平林初之輔によって問題提起された(「政治的価値と芸術的価値 マルクス主義文学理論の再吟味」『新潮』一九二九年三月)。しかし、その後、さまざまに議論されたがなかなか一定のコンセンサスをえることとなく、戦後にやっと吉本隆明が三浦つとむの言語論を媒介にすることで、『言語にとつて美とは何か』(勁草書房 一九六三年五月)によってはじめて、作品の価値あるいは美の根拠を(言語)の構造から解き明かそうとした。ただ、その吉本隆明も、作品の価値は作品の内部に(ある)もの、つまり作品に内属しているという考えに縛られていて、有効な文学価値論を構築できず頓挫することになった。そして、不幸なことに、この価値をめぐる原理論の(空白)を埋めたのが、「作者の死」を宣言し、「読者」の重要性和「還元不可能な複数性」としてのテクストの構造を明らかにしたバルトのテクスト理論であった。日本の思想家、文学研究者は作者を中心とした(読み)や、価値は作品の内部に(ある)という文学的価値論から抜けられず、結局、目の前の直近の問題を自前で解決する暇もなく西洋発のテクスト論によって(跨ぐ)ということを余儀なくされたのであった。その結果としてかろうじて持続してきた平林以来の(主体)や(価値)に関する問題意識の大切さ(重さ)さえ忘れ、それにこだわることを(古いこと)のように蔑んでしまったのである。

これ以後、日本では安保体制下のもとでの経済の成長に支えられた豊かな日本、いわば〈欲望の帝国〉へと向かった。しかし、「和風てくすと論」「和風ポストモダン論」なるものが、この〈欲望の帝国〉に対して有効な戦いを組織できたとは思われない。それというのも、一度も自前で理論を調達できなかったあげくの借り物だったからである。

繰り返せば、西洋の知性のポイントは西洋の〈捉え直し〉であり、そのために西洋、キリスト、マルクスという〈絶対〉〈唯一〉〈中心〉と対峙し乗り越えるべく多義性、差異性論を展開した。ところが、一度も〈絶対〉〈唯一〉〈中心〉たる文化も権力も持ったこともない日本では、この西洋の思想の急所、〈深刻な葛藤〉が見えず、したがってまた、実際、一度も自己を権威として登場させることなく、また責任をとることもなく連面と生き続けた天皇制なるものとの対決の必要性を深く自覚することもなく、植民地主義あるいはナショナリズム批判としてのポストモダン論にのっかり、日本の近代文学は自己の植民地に対する加害者としての自覚を欠如した(他者)なき文学であり、結果としてただ国民国家という「大きな物語」を支えたまことに自己中心的で罪深い文学だといった他人事のような近代主義

的批判を結果的に繰り返すことになった。言語にとつて天皇制と闘うということはどういうことなのかという問題意識がすっかり抜け落ちてしまったのだ。

ところで、今、日本はどのような状況にあるのか。

自分の欲得ばかりを計算して忖度する精神を身につけ、国家の行政文書を平気で改ざんする異常さに怒ることも、権力が平気でメディアに介入することにも恐怖する心もなくして、まさに多義性、差異性を認めないファシズム的心情の中に国民の多くがあるという状況ではないか。もちろん、これらの原因のすべてを西洋発の第三の文化の波（注4）たるテキスト論あるいはポストモダン論といわれるものとの不幸な出会いと受容に求めることは乱暴かもしれない。ただ、私はそろそろテキスト論あるいはポストモダン論の果たした〈罪〉＝負の部分の問題を真剣に総括する時期にきているのではないかと思っている。それというのも、冒頭にも述べた若い研究者の論文における〈読み〉の不在の問題はいまでもなく、個別の〈読み〉や〈価値〉にこだわることをちまぢまじどうでもいい研究であるかのように蔑む感情が文学研究の中に無自覚なまま受け継がれてそれがあつた種の研究の停滞と混迷を生み出しているように思われるからである。

### 三

一体、〈読み〉や〈価値〉を忘れた文学研究など私には「唄を忘れたカナリヤ」のように思われる。〈読み〉とは読み手の〈主体〉をかけた対象との対話であり、読み手の主体性や思想性を抜きにしてはありえない行為であるからだ。たしかに、文化研究的な〈視点〉からテキストへの接近はありえるし、その有効性や意味を否定するつもりもない。しかし、文学研究と文化研究は異なっている。そもそも文化研究は文学の解体を目指すものではないし、それらは相補関係にこそあるべきものである。この差異と相補の関係を曖昧にしてきたことが混乱のもとではないか。

テキストの中の「引用の織物」の痕跡(情報)の中から都市空間に着目し、それに関する文言と当時の歴史的な文献等を取り合わせ、主人公の自我、内面を説明しようとしたのが前田愛の「舞姫」論(注5)であつた。それは、都市空間としての文学というそれまで余り誰も気がつかなかつた〈外〉からの斬新な切り込みによって、近代的自我の覚醒と挫折、立身出世と愛といった図式の中で読まれてきたこれまでの「舞姫」の〈読み〉を「炸裂する「世界都市」にまぎれこんだ異国の青年のものがたり」へと読み替えることで、そこに

知的で刺激的な〈読み〉の世界を切り拓いてみせたといわれている。しかし、その手法た

公の意識、自我をなぞった(説明した)だけで、ありていに言えば、かなり昔(一九三〇年代のプロレタリア文学の時代)の素朴反映論的な説明の仕方、歴史社会科学ならぬ都市空間論による「絵解き」ではないかという気がする。もちろん、〈読み〉の方法などこれではなければならないといったようなものは何もない。ただ、〈読み〉の一瞬の面白さではなく、それがテキストの核心に届いているかどうかで方法の可否もまた問われなければならないだろう。果たして「舞姫」の語り手が語ろうとして語れなかったもの、すなわち友達に責任転嫁をする形でしか語れなかったその向こうにあるテキストの〈空白〉とは、「炸裂する「世界都市」にまぎれこんだ異国の青年のものがたり」という淡泊なものであったのかどうか。どうも、そうではなく、百三十年前から、今日までずつとつづく日本人の責任を回避しつつひたすら付度していく精神そのものを語ろうとしていたのではないか。ただそれを語りえずテキストの〈空白〉として抱え込みながら、〈嘆き〉の中で閉じたのではなかったのか。そしてそこにこそ「舞姫」の本質的な問題があったのではないか。その意味において、作者還元主義的な〈読み〉からぬけなければならないのはもちろんであるが、読者還元主義的な〈外〉からの都合のいい〈読み〉もまた克服さされなければならないのではないか。いずれの〈読み〉もテキストを疎外しているからである。

それでは、テキストを疎外しない〈読み〉とは何か。

文学テキストは、言葉によって書かれたあるいは語られた部分と、ちやうど裏表の形で、書かれていない、語られていない〈空白〉の部分とによって成り立っている構造物である。〈読み〉とは、この言葉によって語られた〈表〉の「意識の劇」(表層)を読むだけでなく、むしろその〈裏〉に自動的に生成されていく、書かれてもいない、語られてもいないいわゆる行間と称される領域を「関係の劇」(深層)として意識的に再構成することで、そこどのような関係性の〈豊かさ〉——指標として人権性・批評性・共生性——があるかを想像力を働かすことで見通し、批評し、価値づけしていくことではないか。

これまで、主人公の意識、思想、主体性の高さにだけ関心が向かい、かれがその〈高さ〉ゆえにどんな〈豊かな〉関係を作りだしているのかということに関心が向かなかった。しかし、本来、〈意識〉の最終的評価はその認識の高さではなく、それが最終的に他者・自然・世界との関係においてどのような関係をつくり出しているかで問われる必要がある。主人公を含めて多様な〈意識〉がどう〈豊かな関係性〉をつくりだしているかをテキストの評価、価値の最終判断にしているのはそのためである。

ところで、関係性の〈豊かさ〉——その向こうには人間の醜さ、残酷さがある——とは、

人間と人間・自然・世界との関係の〈豊かさ〉〈深さ〉〈広さ〉をさし、そこには富や地位、競争ではなく共存、差異、相互補助を原理とする〈やさしさ〉があると考えている。そしてそれを検証する指標としてとりあえずここでは人権性・批評性・共生性をあげている。しかし、その指標をめぐってあれこれ語ることに意味があるわけではなく、むしろ、〈今・ここ〉のテキストの「関係の劇」の〈空白〉の中にそれらがどうイメージされているかを読み取り議論していくことこそ大切であろう。つまり、ここで大切なのは、言葉で書かれた(語られた)いわば〈表〉の自明の世界(「意識の劇」の領域、「引用の織物」の痕跡、あらすじ)をいくら資料を積み上げて傍証したところで、それは〈読み〉の前段の作業でしかないということである。〈読み〉とは、書かれてもいない、語られてもいない領域を「関係の劇」(深層)として意識的に再構成することで、そのテキストの〈空白〉の中に何か語られているかを想像力を働かすことで見通し、批評し、価値づけていく行為だと考えているからである。実はこの〈空白〉の中に、これまで想像さえしなかった、できなかった、あるいは語ろうとして語り得なかった〈こと〉が何であったのかが一瞬間的にイメージ(見える化)される時、われわれはテキストから言いようのない《感動》を受けのではない。そして、この《感動》の根拠に出会うことによってはじめてテキストの評価、価値というものも生まれてくるのではない。その意味において、文学テキストの《感動》の根拠とクロスすることのない〈読み〉はたとえそれがいかに知的で刺激的な〈読み〉であっても、やがて人はその〈読み〉がテキストの《感動》の根拠と無縁な単なる〈読み〉のずらし、パフォーマンスであり、〈読み〉の啓蒙主義でしかないことにきずくのである。テキスト論の登場以後、そこに多くあったのは「哲学の貧困」(マルクス)ならぬこの種の〈読み、の貧困〉というべき事態であった。

たしかに、バルトは「テキストの「引用の織物」を、「解きほぐす」ことを語った。それでは「解きほぐ」されたテキストはどうなるのか。もちろん、新しく〈織り直される〉ことになるが、バルトはそこでの読みの「快楽」を語っている。言うまでもなく、それはテキストの「消費」、すなわち作者や語り手の戦略の中で読み直す〈喜び〉ではない。新しく〈織り直され〉たテキスト、すなわち新しく「関係の劇」として再構成されたそのテキストの中に、〈主体〉的、〈価値〉論的にかかわっていくことで、語り手が語ろうとして語れなかった(もう一つの物語)を想像力を介して見通し、探り当てようとする〈読み〉の喜びにほかならない。そして、バルトは、この読みの「主体」は「裁判官、教師、精神分析医、贖

否定したのではない。たえず権力的であろうとする（読み）と戦ったのであり、そこに限りなくリベラルであることを説くバルトのテキスト論の精髓があった。

かつて、小田切秀雄の近代的自我史観はもう古いとさきやかれた。しかし、今、振り返ると、その小田切の文学の価値、評価基準としての主人公の〈近代的自我〉など日本のどこにあるといえるのだろうか。私たちはポストモダンなどといわれる気楽なところに住んでいないことだけはたしかであろう。そしてまた、近代的自我論を突破した〈豊かな〉文学テキストの〈読み〉はその後あふれでているのだろうか。西洋発のテキスト論との出会の問題は遠く過ぎ去った問題ではない。私たちは、日本近代文学の〈自負すべきもの〉はこれだといいきれない悲惨な状況にいる、まずこの自己認識を持つことから前に進んでいきたい。

（注）テキスト論等の問題については、以下の拙論ですすでに触れている。

\* 「様々な意匠の行方」（日文協近代部会誌『葦の葉』号 後、『近代文学研究』0号（一九九三年四月）に再録） \* 「天皇制・他者・テキスト論について」（日文協近代部会誌『葦の葉』I44号 後、

『近代文学研究』3号（一九九六年二月）に再録 \* 「テキスト論の功罪」（日文協近代部会誌『葦の葉』I7号 後、『近代文学研究』I6号（一九九八年二月）に再録）

（注）田中実がなんでもありの〈読み〉の状況と真摯に向かいあってきたことは認めたいが、その彼がやがて「第三項」理論なるものをとなえるのだが、なぜそうなってしまったのか私には正直よくわからない。その理論は今村仁司の『排除の構造』ちくま学芸文庫 一九九二年一〇月）によつてはるか以前にすでに乗り越えられているからである。

（注3）拙論「文学的価値」〈関係の豊かさ〉「論—文学の〈豊かさ〉に向かうための読みの方法序説—」（試想の会編『試想』9号 二〇一八年二月）、後、改定して、宮崎大学図書館リポジトリに登録。

（注4）一波は明治維新の文明開化の波、二波は戦後のアメリカからの民主主義の波、第三波はテキスト論、ポストモダン論の波である。この波ではいわゆる新自由主義にからめとられただけでなく、主体や価値の喪失あるいはその自覚の欠如という点で深刻である。世界はグローバリズムという名の資本の暴走を許し、世界的な規模での環境破壊や人体への健康被害たとえばコロナウイルスの感染にさらされているが、〈主体〉や〈価値〉の問題はどう問い直されていくのであろうか。

（注5）「BERLIN 1.888」（『文学』一九八〇年九月 のち『都市空間のなかの文学』筑摩書房

